

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動 —バイブル・ウーマンに着目して—

Eliza Talcott's Missionary Work in the U.S. and Hawaii :
With a focus on Bible Woman

石 村 真 紀

Ishimura Maki

アメリカン・ボード日本派遣女性宣教師イライザ・タルカットは、明治期を通じて日本の女性への伝道、教育に力を注いだ。その過程においてバイブル・ウーマンの重要性を実感した。本論文では、賜暇帰米とハワイでの伝道支援期間のタルカットの活動を通じて、タルカットの求めたバイブル・ウーマン像を明らかにする。その上で、日本人女性クリスチャンにふさわしいバイブル・ウーマン像を示しえたことが、タルカットの日本伝道の成果の一つとなったことを検証する。

Eliza Talcott, missionary sent to Japan by the American Board, focused her efforts on evangelism and the education of Japanese women throughout the Meiji period. During her time in Japan, she recognized the importance of the figure of the Bible Woman. This study discusses the image of the Bible Woman Talcott sought through her activities during her furlough in the United States and her missionary work in Hawaii, and evaluates Talcott's establishment of Bible Woman for female Japanese Christians as one of her achievements during her missionary work in Japan.

目次

はじめに

I 賜暇婦米中のタルカットの活動

- 1 賜暇婦米の経緯
- 2 賜暇婦米中の活動
- 3 LL 投稿にみるタルカットのバイブル・ウーマン観

II ハワイにおけるタルカットの活動－教え子との協働と新たな伝道形態の模索

- 1 19世紀後半のハワイ
- 2 タルカットのハワイ伝道協力の経緯と当初の活動
- 3 タルカットのハワイにおける活動
 - (1) 活動の概観とこれまでの経緯、社会状況
 - (2) バイブル・ウーマンとしての教え子らとの協働

おわりに

はじめに

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) は、プロテスタント海外伝道団体アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions, 以下 ABCFM) が日本に派遣した最初の女性宣教師⁽¹⁾である。1873年に神戸に着任、ともに来日した女性宣教師ジュリア・ダッドレー (Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906) と、現在の神戸女学院となる女子寄宿学校を創立した。その後、岡山、京都、ハワイ等で伝道に力を注ぎ、京都看病婦学校、神戸女子神学校でも教鞭をとった。タルカットの日本での活動については、これまで主として神戸と京都での教育活動に関する研究がなされてきたが、タルカットは各地への伝道も来日初期から活発に行っており、ABCFM 関係の機関誌やその他の文献によってそれを知ることができる。⁽⁴⁾むしろ、教育にたずさ

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動
わるよりも伝道、特に女性を対象とした伝道活動や、のちに社会福祉事業に発展する孤児院設立の支援、病院訪問といった社会的弱者の救済をめざした活動に積極的に関わっていた。

本論文においては、タルカットの2度目の賜暇帰米期間とそれに続くハワイでの伝道支援活動期間を取り上げる。賜暇帰米というには長い6年にわたり日本を離れることになったタルカットにとって、このアメリカ本国とハワイで過ごした期間は前後の日本での伝道活動においていかなる意味があったのであろうか。在米中、タルカットは休養するばかりでなく各地の教会で日本での伝道活動について講演を行い、機関誌に投稿するなど、他の宣教師と同じように支援者に向けて活動の報告・宣伝に努めた。そこでタルカットが特に力を入れたとみられるのは、バイブル・ウーマン (Bible Woman) と呼ばれる現地の女性伝道者の活動とその養成の重要性を訴えることであった。タルカットが神戸、京都で女性への教育・伝道に携わる間に会った教え子らは、日本各地で女性への伝道に直接間接に関わり、またタルカット自身の活動の協力者として重要な位置を占める存在となった。タルカットは彼女らをバイブル・ウーマンの見本として紹介し、伝道地で果たす役割の大きさを実感させるように紹介した。本論文ではタルカット在米中の活動からバイブル・ウーマンへの言及を中心に提起し、タルカットの20年以上に及ぶ日本での伝道活動から得られた成果が自身の伝道観形成へとつながり、さらにはアメリカ本国のクリスチャン女性へ還元されていったかについて検討したい。

また、ハワイ伝道支援については、当初は日本帰任前の一時的なものであったはずが不慮の事情があったとはいえ長期間となった。そのため、タルカットは期せずして日本伝道ともアメリカ国内伝道とも事情の異なる日本人移民女性への伝道に関わらざるを得なくなった。しかしハワイでもタルカットは自身の教え子の協力を得ることができた。その中には、前述のバイブル・ウーマンの見本としてあげた女性が複数含まれている。それは、日本人女性への伝道に長

らく携わったタルカットにとっても初めての伝道対象である、日本人移民女性への伝道の大きな助けとなったと考えられる。ハワイにおける日本人移民女性への伝道を通じて、タルカットはこれまでの日本女性への伝道活動の経験を生かしつつ、これまでにない伝道経験を積み重ねる機会を得た。そこでも役割を果たしたバイブル・ウーマンの存在は、タルカットに優れたバイブル・ウーマンの可能性を確信させるに至ったとみられる。賜暇婦米及びハワイ伝道支援期間のタルカットの活動をバイブル・ウーマンというキーワードに着目し、これまで検討されてこなかった一面について考察を加える。

I 賜暇婦米中のタルカットの活動

1 賜暇婦米の経緯

タルカットは日本派遣宣教師として38年間在任したが、その間に2度、休暇により婦米した。最初は1883（明治16）年末から1885（明治18）年8月までの1年半余り、2度目は1896（明治29）年2月から1902（明治35）年末までである。2度目の婦米には、日清戦争時に広島病院での活動中にコレラに罹患、以後体調不良となったことが関係している。1895（明治28）年末には仕事に差し支えるほどの疲労で休暇婦米勧告されるに至り⁽⁵⁾、翌1896（明治29）年2月に婦米の途についた⁽⁶⁾。5月にサンフランシスコに到着し⁽⁷⁾、当初は半年程度の休暇を予定していたようである。しかし体調の回復が思わしくなく⁽⁸⁾、1897（明治30）年末ごろから翌1898（明治31）年4月まで、ニューヨーク州クリフトン・スプリングスの保養施設に滞在して休養することとなった⁽⁹⁾。婦米して4年目となった1899（明治32）年7月、日本伝道団の年次総会においてタルカットの京都ステーションへの帰任が決議される⁽¹⁰⁾。それに対してタルカット自身は、ハワイで伝道にあたっている O.H. ギューリック夫妻（Orramel Hinckley Gulick, 1830-1923、Anna Eliza Gulick, 1833-1938）らの要請を受けて、ハワイを經由

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動して日本帰任をしたいとの意向を示した。⁽¹¹⁾ こうしていったんはタルカットの日本帰任が決まったが、⁽¹²⁾「腕の腫物」のために出発延期を余儀なくされた。⁽¹³⁾ その後、1900 (明治33) 年2月に予定された日本帰任は再度延期され、1900 (明治33) 年6月ようやく日本帰任の運びとなった。⁽¹⁴⁾ この間、タルカットは通常の賜暇期間より長く、足掛け5年をアメリカで過ごすこととなったのである。

2 賜暇帰米中の活動

帰米中のタルカットの活動について資料から跡づけると、次のようになる。1896 (明治29) 年5月に帰米したタルカットは、その年11月に開催されたウーマンズボードの⁽¹⁶⁾年次総会で、広島病院における日本人兵士と中国人捕虜に対する活動について報告した。⁽¹⁷⁾ この報告について記した記事の中でタルカットは "Florence Nightingale of Japan" とたたえられ、病院での活動は患者のみならず医師や看護婦にも歓迎された、とされている。

1897 (明治30) 年10月にはコネティカット州ニューヘブンで開催された ABCFM 年次総会に⁽¹⁸⁾出席、この年と翌1898 (明治31) 年の ABCFM 年次報告書に、ニューヨーク州、ニュージャージー州、コネティカット州などの教会を訪問したとの記載がある。

1897 (明治30) 年末から1898 (明治31) 年4月にかけては、休養のためニューヨーク州クリフトン・スプリングスの保養所に滞在したことは前述の通りである。しかしその年の夏には、帰米していた他の日本派遣女性宣教師とともに、日本から帰国した2人の女性宣教師を⁽¹⁹⁾訪問している。

1899 (明治32) 年3月にはウーマンズボード太平洋支部の Quarterly Meeting に招かれて日本における教育活動について講演し、5月には同支部の⁽²⁰⁾例会に⁽²¹⁾来賓として出席した。

賜暇帰米中の宣教師にとって、ABCFM の年次総会に出席したり、地域の教会で伝道活動について報告したりすることは必須の重要な活動であり、それ

に加えて女性宣教師たちには所属するウーマンズボードの集まりに招かれて語ることが求められていた。タルカットも例にならい、体調回復を図りながらこれらの会合に出席したものと思われる。そうした活動の合間、1897（明治30）年3月のLLにタルカットは“The Work of Bible Woman in Japan”と題した長文を寄稿している⁽²²⁾。この賜暇帰米の直前、タルカットの広島での活動はLLに非常に大きく取り上げられ、注目を集めていた⁽²³⁾。実際にタルカットが招待された会合でまず語ったのは、広島での経験であった。それに次いでタルカットがLL読者にアピールした話題が、バイブル・ウーマンについてである。この投稿について検討しながら、タルカットの考えるバイブル・ウーマン観を明らかにし、日本伝道での経験とバイブル・ウーマンに着目、重視するに至ったところを整理していく。

3 LL 投稿にみるタルカットのバイブル・ウーマン観

投稿文においてタルカットは、まず日本におけるバイブル・ウーマン誕生の経緯⁽²⁴⁾とその特徴について述べる。

日本伝道の初期にキリスト教に改宗した人々の中に、いくらかの聡明で熱心な女性がいました。当時から、その女性たちの助言や協力は、宣教師たちの働きが成功を収めるに大きな助けとなる、伝道地の人々の習慣や考え方についての知識不足と、言葉を上手に操る能力の不足を補い、伝道の大きな助け手となっていました。年とともに、伝道の場の実情や女性たちの示す能力により、彼女らへの依存度が高まっていることが明らかになり、宣教師と協働するにせよ単独で活動するにせよ、よりよく訓練されたバイブル・ウーマンを養成しようという機運が醸成されました。そして1881年、神戸にミス・バロウズとミス・ダッドレーによって女子伝道学校（Women's Bible School⁽²⁵⁾）が開かれました。この学校はこれまでに50人以上の卒業生

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動を出し、彼女らは日本各地に散らばって教会の創立のために貴重な働きをしています。何人かは、単独での活動において我々の期待以上の能力を発揮するまでに成長しました。伝道団が牧師とバイブル・ウーマンを支援してきたある教区では、最近その削減が議論された折、信徒たちが、もしこれらの働き手の一人でも諦めねばならないのなら、とにかくバイブル・ウーマンには残ってもらわねばならない、とされています。

それはクリスチャンの信仰の力を示し、女性たちを生活習慣を超えて善へと導く力でもあります。さらに、彼女たちがバイブルスクールに在籍した際の指導者たちの、自由と教育の素晴らしさの成果でもあります。また生徒の選考、教育を行う間に彼女らに常に与えている影響の証左でもあります。

「その女性たちは何をしているのか」と読者は尋ねるでしょう。彼女らはコミュニティに入っていく、できる限り多くの人々と知り合いになり、自分たちの生き様と言葉で、キリストが彼女らに何をなしたかの話に耳を傾けてくれる人々を勝ち取っていきます。彼女らはしばしば、女性たちに理性的に学ぶことを教えます。偏見や妬みを取り除く努力をし、教会の女性たちに、自分たちの家庭の外にもそれを広めていく特権と責任を持っているという気持ちをかきたてます。通常、彼女らはバイブルスクールにいるときは簡単な讃美歌を教わるなどして、出かけて行ったクリスチャンのコミュニティに幸いにも小さいオルガンがあれば、彼女らは曲を演奏し、⁽²⁶⁾礼拝での讃美歌歌唱に奉仕します。

ここでタルカットは、バイブル・ウーマンが女性への伝道について非常に重要な役割を果たしうることを示唆している。加えて、有能なバイブル・ウーマンの養成が不可欠であり、日本伝道においては早い時期からその点に力が注がれてきたことを述べている。タルカットが日本伝道の場において経験した、養

成機関の充実と一体となったバイブル・ウーマンの活躍を強く訴える意図があると考えられる。

続いてタルカットは、写真付きで日本のバイブル・ウーマンを紹介する。

2人、あるときは3人のバイブル・ウーマンが、中国との戦争の間、軍の病院に入院している兵士たちを訪問しました。この号の表紙には3人の⁽²⁷⁾バイブル・ウーマンの写真がありますが、みな子供のいない未亡人です。

写真の左側の2人は約8か月の間、病院で活動しました。中央がミセス・フォークで、ご夫君はかつてアメリカ海軍大尉、その後3年前に亡くなるまでは京都の同志社大学で数学の教授でした。⁽²⁸⁾彼女と、右隣のミセス・カトウは兵士に対する活動に最も長けていました。彼女たちは常に病人たちの感謝の念を集め、医師や看護婦らに謝意を示されていました。ある日、彼女らはちょうど戦地から帰ったところの病人のベッドサイドに立っていました。病人が会話するには弱りすぎているのを見て取ると、わかりやすい慰めの言葉をかけ、差し支えなければ、お友達に電報かはがきを送るお手伝いをしましょうと申し出ました。次にその病院を訪問した時、先の病人の母親が遠く離れた家から看病に来ていました。訪問者たちが病室に入ってくるのを見ると、彼はすぐに母親を呼んで、「前に私に親切にしてくれた、このイエスの婦人たちにお礼を言ってください」と言ったので⁽²⁹⁾す。

ここで取り上げられている2人はいずれも前段で紹介した女子伝道学校の初期の卒業生である。ミセス・フォークは旧姓名を村瀬かねといい、⁽³⁰⁾1895（明治28）年に女子伝道学校を卒業後、三田、小樽、多聞の各教会で伝道師として奉仕した。ミセス・カトウは1894（明治27）年に女子伝道学校を卒業した加藤常⁽³¹⁾子である。加藤は現在の鳥取県倉吉市の出身で、倉吉教会において受洗したの

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動
ち女子伝道学校に学び、卒業後は神戸、津山、米子、札幌、仙台、奈良と各地
で伝道師として活躍した。

フォーク、加藤はともにその後半生を伝道に捧げたバイブル・ウーマンであるが、タルカットが続いてあげた2人は、同じバイブル・ウーマンでも伝道だけでなく多様な働きをした人物としてさらに詳しく紹介している。

タルカットがまず取り上げたのは、当時ハワイで活動していた宗えい子である。宗はハワイで ABCFM 宣教師とともに日本人移民女性への伝道と日本人移民の子どもを対象として幼稚園での教育に力を注いでいた。

ミセス・ソウも子供のいない未亡人で、2年間、ミセス・ギューリックに協力してホノルルの日本人教会でともに働いてきました。不幸な状況にあるハワイの日本人女性は多くが貧しい地区に住んでおり、その国籍の故に低俗な人々に侮辱されがちです。彼女は主の名において、また彼女が関わっていかうとする女性たちのために、勇気を持って接していきます。彼女は午前中、ハワイのウーマンズボードの経営する幼稚園で教え、子供たちの助けとなるだけでなくその両親に接する機会も得ています。⁽³²⁾

ミセス・ソウこと宗えい子⁽³³⁾は福岡の出身で早く夫と死別、それをきっかけに ABCFM 宣教師 O.H. ギューリック夫妻との出会いもあってキリスト教に入信し、1891 (明治24) 年に女子伝道学校に入学した。2年間の学業ののち福岡に戻った宗は、ギューリック夫妻を助けて伝道活動に携わることとなった。記事には宗について記した箇所を挟んで、写真が挿入されている。なお、宗とタルカットはハワイ伝道支援で深く関わるのであるが、その点については後述する。

そして日本人バイブル・ウーマンの最後に、タルカットは炭谷小梅について最も紙幅を割いて紹介する。

最も有能なバイブル・ウーマンの一人は、岡山出身のミセス・スミヤです。彼女は学校で聖書について特別に学んだことはありませんが、しばらくの間、神戸の女学校で学び、それ以来何年も宣教師たちと深くかかわってきました。ミセス・ペティーの活動の大切な助け手です。生来の豊かな才能とエネルギーをすべて救い主に捧げて、彼女はその地域の政治家の家にも貧しい農民の小屋にも等しく入っていくことができます。キリストに出会った時、彼女は裕福で影響力のある男の愛妾でしたが、込み入った関係を断ち、清貧の生活を選びました。彼女は養父のもとに戻りましたが、養父は信仰を持たず、彼女が縁を切った男にずっと強く依存してきたので、彼女の新たな決断に猛反対しました。彼女は黙って養父の反対に耐え、その小汚い家をきちんと整え、自身の存在によって明るいものとしたのです。老人はついにキリストの愛と義に心を開きました。彼女は何年もの間、石井氏の岡山孤児院で最も優れた助言者であり、石井氏は彼女を「孤児院の母」と呼んでいます。彼女の名は、熱心で賢明、有能な働き手として広く遠く知れ渡っています。

宣教師のステーションから離れたところにある小さな教会が、非常に残念なことに何年かの間、現実的な対立問題から活動が停滞していました。どちらのグループも牧師を助けようとしないうばかりか、離れていったグループの指導者たちに従うことはプライドが許さず、彼らの支持者たちは当然付き従っていきました。ミセス・スミヤは教会を訪れ、両方のグループと接触しました。彼女はこの対立を取めるために神から遣わされたと感じ、そして彼女の信仰と愛がついに勝利を得たのです。プライドを捨てられなかった人々は譲歩し、教会は再び一つになって、それ以来調和を取り戻して歩みを続けています。⁽³⁴⁾

炭谷小梅はタルカットが岡山伝道において出会った女性である。岡山県の有

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動

力者、中川横太郎の妻であった炭谷はタルカットとの出会いによってキリスト教に入信、岡山教会の主要メンバーとして岡山で活動する宣教師に協力するだけでなく、石井十次の運営する岡山孤児院の活動を支えた重要な人物である。タルカットが特に炭谷小梅を有能なバイブル・ウーマンとして紹介したのは、当初から自身と深く関わった人物であるからというだけでなく、タルカットが指向するバイブル・ウーマンの理想を彼女が体現しているからであると考えられる。文中にあるように、特に聖書やキリスト教について深い知識を持たなくても人々の心を捉え、接する人の身分や主義主張にかかわらずその心情を理解できる人物が、バイブル・ウーマンとして理想的な活躍ができるとみているのである。また、たとえそのような性質が生来備わっていなかったとしても、伝道学校での学びや他のバイブル・ウーマンから学ぶことによって、より優れたバイブル・ウーマンになることができるとも考えている。

投稿の最後をタルカットは次のように締めくくっている。

こうした女性たちと協働する特権を、宣教師たちはたいへん重んじています。そして、もしこの国（アメリカ：筆者註）に寛大にもこうした女性たちを教育する手伝いをしてくださる方々があるならば、あるいは今まさに彼女たちの愛の働きを助けてくださっている方々は、すでに何が行われてきたかを知ることができるでしょう。このようなよい活動について共有できることは喜びであり、より多くのこうした優れた働き手が訓練され、主のぶどう園に遣わされるように熱心に祈っていただけることでしょ⁽³⁵⁾う。

タルカットの投稿が掲載された2年後、LLの1899（明治32）年4月号には、各伝道地のバイブル・ウーマンに関する記事がまとめて掲載されている。その最初に、ウーマンズボードのディレクターの一人である S.B. カプロン夫人による“The Bible Woman”と題された記事がある⁽³⁶⁾。その中でカプロン夫人は「バ

イブル・ウーマンは読者の現地の姉妹であり、外国伝道場で皆さんを代表して働いている」と記した。さらに、「バイブル・ウーマンは宣教師にとってなくてはならない協働者」であり、「活動が停滞している伝道地の教会や伝道そのものがうまくいっていない場所で、現地の人々に関わり、再び活動を盛んにすることができる強い味方」であると述べている。そして、「長く外国伝道に携わっている宣教師ほど、バイブル・ウーマンの必要性を強く語る。伝道地の習慣を知り、適切な方法で伝道を進めるためにバイブル・ウーマンは欠かせない存在である」という。さらに、「バイブル・ウーマンが聖書の教えや伝道について学ぶことのできる教育機関を整えていく必要がある」とも記している。このカプロン夫人の言説はまさにタルカットがその2年前に投稿した内容と一致するものであり、ウーマンズボードもバイブル・ウーマンの活動とその養成に関心を示し、組織的に関わっていかこうとする姿勢を明確にしているといえることができる。

II ハワイにおけるタルカットの活動

一 教え子との協働と新たな伝道形態の模索

1 19世紀後半のハワイ

次に、タルカットのハワイでの活動を見るにあたり、19世紀後半のハワイの社会状況について概観しておく。⁽³⁷⁾

ハワイは1778年にイギリス人クック (James Cook, 1728-1779) が到着した後、1810年にカメハメハ大王がハワイ諸島全土を統一してハワイ王国が成立した。1820年、ABC FM 宣教師団がハワイに至り伝道を開始、同時にハワイ王国の近代化に貢献することとなった。近代国家をめざしたハワイは、捕鯨、農業を中心として発展したが、一方で疫病の流行によってハワイアンの人口が激減、農業振興のために労働力として海外移民の受け入れが始まった。日本からも移

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動民を迎えるべく徳川幕府との間で交渉が進んでいたが、明治維新により頓挫し、政府公認ではないいわゆる「元年者」が最初のもともった移民として出国することになった。1881 (明治14) 年、ハワイ王国カラカウア国王が世界周遊旅行の途中に来日、日本人移民派遣を申し入れた。当時、経済不況に見舞われ日本国内では地方農民の出稼ぎ労働が深刻になっていたこともあり、日本政府はこの移民要請を受け入れた。1885 (明治18) 年から1894 (明治27) 年までの間に、政府が派遣するいわゆる官約移民約28,000人がハワイに渡航した。以後、移民業務は民間会社を取り仕切るようになり、1900 (明治33) 年までに約46,000人が送り出された。日本人移民は約8割が男性で、家族で来布する例はまれであった。主として砂糖プランテーションの労働者となった日本人移民だったが、労働条件は厳しく、生活環境も整わない状態であった。ハワイ社会の中でも日本人の評判は芳しくなかった。ハワイには日本人の他に中国、フィリピン、ポルトガルなどの移民がそれぞれの移民社会を形成、支配階級であるアメリカ人も含め、非常に複雑な社会構成となっていた。

ハワイ王国は1893 (明治26) 年にハワイ革命により君主制が倒れ、暫定政府がたてられた。この政変によってハワイはアメリカへの併合の道を進むこととなった。暫定政府は共和制を宣言してハワイ共和国となったが、アメリカとの関係については議論が続いていた。しかし1897 (明治30) 年、太平洋へのマニフェスト・ディステイニーを主張するマッキンレー大統領の就任によりハワイ併合の動きが加速し、翌1898 (明治31) 年アメリカ議会はハワイ併合案を可決、ハワイはアメリカに併合され、准州となった。

2 タルカットのハワイ伝道協力の経緯と当初の活動

1900 (明治33) 年6月、タルカットは賜暇帰米を終え日本に帰任するべくサンフランシスコを出発した。帰任にあたっては、ABCFM 日本伝道団の要望によりタルカットは京都ステーションに所属することが決まっていたが、その⁽³⁸⁾

まま日本に赴任したのではなかった。前述のように、ハワイの日本人伝道に協力するためまずホノルルに向かい、1900（明治33）年6月12日にホノルル⁽³⁹⁾に到着した。ハワイでの活動は、同じ ABCFM 宣教師のゴードン（Marquis Lafayette Gordon, 1843-1900）が着任するまでの短期間のはずであったが、ゴードンが急死したことによりその後任者が決定するまでの2年半近くに及び、最終的にタルカットが日本に帰任したのは1902（明治35）年12月であった。

ハワイでの活動予定期間が当初はごく短いものであったことは、タルカットの乗った客船の到着を報じたハワイの英字新聞各紙が、タルカットを「神戸行きの船客」としていたことからも読み取ることができる。これら英字新聞および邦字新聞には、タルカットのハワイ到着後の活動についての記事が掲載されている。それらを順に見ていくと以下の通りとなる。

- ・ 1900（明治33）年7月9日 禁酒会月次会において日本語で講演⁽⁴²⁾
- ・ 8月7日 ハワイウーマンズボード月次会においてホノルルの日本人に対する活動について報告⁽⁴³⁾。併せて、中国で活動中のホノルルに馴染み深い宣教師の消息について報告⁽⁴⁴⁾。
- ・ 9月19日 日本人教会において慰労と送別の会開催、150人出席。9月29日出港の日本丸にて日本へ向かう予定。
- ・ 9月28日 Punahou College の新任者歓迎パーティー出席者名簿に名前あり⁽⁴⁶⁾

これらの記事に見る通り、タルカットは当初、約3か月の予定でホノルルでの日本人伝道にあたり、9月末に日本に向かうことになっていたようである。しかし、送別会まで行われたにもかかわらずタルカットはさらにハワイにとどまることになった。この間の事情は、ハワイアン・ボード（Hawaiian Evangelical Association、以下 HEA）の記録からたどることができる。10月1日のホームミッション委員会⁽⁴⁷⁾においてギュリックがゴードンからの書簡について報告、その内容は、体調不良のためハワイ赴任を取りやめさせてほしい、というものであった。これに関連して、2件の提議がなされた。1件目は、タ

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動ルカットに1900 (明治33) 年7月1日から月給50ドルを支払い、さらに今から6か月の滞在延長をしてもらうこと、2件目はゴードンの代わりにシドニー・ギューリックを、2000ドルの俸給と子供一人につき100ドルの手当、赴任旅費と250ドルの支度金を以て当地での活動のために招聘することである。2つの案件は可決され、タルカットの月給は60ドルに訂正されている。この決定をいち早く報じた10月3日の英字紙記事⁽⁴⁸⁾によれば、来布予定であった ABCFM 宣教師ゴードンが、健康上の理由から残念ながら日本で活動することとなり、タルカットが日本帰任を延期してしばらくの間その任に当たる、と記されている。同記事には、タルカットがギューリック夫妻不在の間の有能な働き手であったことから、当地での活動を続けることになったとある。この決定の直後、10月12日附でタルカットは ABCFM 本部に報告の書簡を送っているが、その中では「ハワイアン・ボードの招請によって、6か月間残ることになった」、「まだ日本行きの途中下船チケットを持っている」と書いている。一方、ハワイでの活動については次のように記している。

最近はプランテーションに出かけております。そこには福音に熱心に耳を傾ける準備のできている人々が多数おります。散らばって単独で活動している伝道者⁽⁴⁹⁾たちが協力し、そうした場所を定期的に巡回しなければならないのですが、有能な働き手を確保するのが難しい状況です。ですから、私は当面の働き場所はここだと思いました。ホノルルにも仕事はたくさんありますが、私は伝道者たちとともにほとんどの時間をハワイ島で過ごし、マウイ島でも過ごすつもりです。伝道者たちから丁寧な招請が来ており、私が出向くことは無駄にならないと思っております。

実際に、後日11月20日、ヒロに向かう船客名簿にタルカットの名⁽⁵⁰⁾があり、このヒロ行きに関する支出25ドルが1901 (明治34) 年1月31日のホームミッショ

ン委員会において承認されている。⁽⁵¹⁾このハワイ島での働きについては、タルカットが11月30日附でコハラから ABCFM 本部へ送った書簡に記されている。その中でタルカットは、「近いうちに日本の友人たちと合流したい」と書きつつも、「ゴードン博士が残念なことに来布かなわず、さらに実際、この地での仕事はたいへん多いので、私が多少なりともその間を埋めなければならないと感じている」としている。そしてハワイ島での活動については次のように報告している。

ここでは一人の伝道者がそれぞれ2, 3マイル離れたプランテーション5箇所をまわっています。私は容易に歩いてゆける距離のキャンプにとどまっています。そこには300人ほどの日本人がおり、毎日彼らに接しています。他の場所でも1, 2回特別に集会を開いています。私は、思ったより元気に活動できていることを喜ばしく感じております。そして伝道者たちが、地道で忠実な活動の結果として豊かな実りが期待できるという、新たな喜びを感じられるようにと願っております。

しかし、続く1901（明治34）年1月21日附の書簡で、タルカットはハワイでの伝道について困難を感じているかのような報告を送っている。

当地の伝道者たちは熱心なクリスチャンと親密な関係を持つことがほとんどなく、彼ら自身が癒しと気付きを必要としているように見えます。あちらこちらで、私は心からの歓迎と協力を受けました。信頼関係を築くことが、たちまち成果をもたらすでしょう。心身の幸福に関心を持っていると示すことが、日本でよりももっと、見知らぬ土地で過ごすよそ者にとっては喜ばれるでしょう。（中略）偶然にも、キリスト教国からきた人々の中に素晴らしい人々がございます。この人たちに、日本人への働きへの準備をする機会を見つけてもらえるようにできれば、と思います。

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動

一週間前にホノルルに戻り、休養のために帰米するミス・ダッドレーと楽しい時を過ごしております。今は前を向き、近時に日本に向かうことを期待しております。次便は間違いなく日本からお送りすることでしょう。

この数か月後、5月13日附ホノルル発の書簡でタルカットは、自身の現状について次のように記した。

これまでと同じように、こちらでの切迫した事情のために日本への出発を遅らせることをお許しいただかねばなりません。こちらに残らなければならないのは明らかです。(中略) ギューリック夫妻がすべての責任を負うべきではありません。ですが、それにかわる新しい人材がどれくらい早く見つかるかは誰にもわかりません。ここでは、霊的であることと同じくらい、知恵と経験を併せ持った人物が求められております。そのような人物こそ、この異国のコミュニティで歓迎され、幸いをもたらし有益な働きをなすでしょう。当地では、非常に重要な働きのためにこのような人物が必要であると確信しております。

当地滞在の延長をご辛抱いただき、何か月もしないうちに日本からご挨拶をお送りできることを期待しております。

書簡の最後は日本への早期帰任の期待をもって締めくくられたが、次便が神戸から発出されたのはそれから2年近く経過した1903(明治36)年3月であった。

3 タルカットのハワイにおける活動

(1) 活動の概観とこれまでの経緯、社会状況

タルカットのハワイでの活動は長期化することになり、それによって当初の

伝道支援よりいっそう踏み込んだ活動を求められるようになったと考えられる。タルカットの実際の活動について、ABCFM 年次報告書、MH 等の記事、ハワイ地元紙の記事からたどり日付順にまとめると、以下の通りである。

- ・1901 (明治34) 年 4 月 25 日 日本人クリスチャン婦人会の年次大会で“Ethics”
について講演⁽⁵²⁾
- ・ 6 月 18 日 婦人労働者ホーム設立事前集会に出席⁽⁵³⁾
- ・ 1902 (明治35) 年 2 月 19 日 YWCA で行われた金採掘に関する講演会に出席
- ・ 3 月 ハワイの宣教師の集まり Cousin's Meeting 例会に出席
- ・ 6 月 4 日 ハワイウーマンズボード年次総会に出席、10月に講演予定
- ・ 8 月 2 日 “Japanese Homes” と題して投稿
- ・ 10 月 7 日 ウーマンズボード月次会で “Forward Movement in Japan” のタイトルで講演
- ・ 11 月 25 日 クラウデイン号でヒロを出航
- ・ 11 月 29 日 ヒロから到着
- ・ 12 月 2 日 ハワイウーマンズボード月次会で日本人に対する活動について講演、ここでまもなく日本に帰任することを明かす
- ・ 12 月 10 日 チャイナ号で日本に向け出航

1901 (明治34) 年前半の段階では日本帰任を待ち望んでいたタルカットであるが、その後はここに見るように日米双方のクリスチャン女性と関わりながら、日本人移民女性への伝道に力を尽くすこととなったのである。⁽⁵⁴⁾

ここで、タルカットが伝道支援に参加するまでの、ABCFM のハワイ日本人移民に対する伝道について概観しておきたい。⁽⁵⁵⁾ ABCFM のハワイ伝道は、サンドイッチ諸島ミッションとして1820年に始まり、ハワイアンに対する伝道が学校教育活動を入り口として行われてきた。その後、ABCFM の伝道方針の変化に伴い、1853年にサンドイッチ諸島ミッションは ABCFM から独立、1854年には Hawaiian Evangelical Association (HEA) が創設された。HEA はハワ

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動

イアンだけでなく中国、ポルトガル、日本からの移民に対する伝道をも担う組織であった。日本人移民伝道に関しては1885 (明治18) 年に着手され、1894 (明治27) 年に O.H. ギューリックが ABCFM ジャパンミッションに在籍しながらハワイでの伝道にあたることになり、HEA の日本伝道部長に就任した。⁽⁵⁶⁾ ギューリックは1911年までハワイでの伝道活動を続けたが、その間、日本人移民の増加により同じ ABCFM 日本派遣宣教師のゴードン、D. スカッター (Doremus Scudder, 1858-1942) らの来援を受けた。⁽⁵⁷⁾ タルカットの活動期間はゴードン不在、スカッター着任の間ということになる。吉田によれば、当時のハワイ日本人移民社会では子弟の教育及び醜業婦が大きな問題となっていた。⁽⁵⁸⁾ 日本人移民の大多数は男性であったため、飲酒、賭博、買春などの社会問題が多発し、日本人移民社会の風紀問題は深刻であった。教育問題については、特に低年齢の子どもの教育環境として幼稚園、小学校が念頭に置かれ、両親の多忙の故に家庭教育を十分に受けることができない日本人移民の子どもたちに、日本語と日本の文化・習慣をきちんと身につけさせることが急務であった。日本人移民の子どもたちは言語や生活習慣を習得する幼児期に放置されてしまい、日本語がおぼつかないままになるばかりか、英語やハワイの言語を中途半端に身につけてしまっていた。このような子どもの成育状況は、日本人移民家族がハワイに定住するにせよ日本に帰国するにせよ、子どもの将来に悪影響を及ぼすことは明らかである。それはもう一つの問題である醜業婦と同様、日本人移民社会全体の評価を下げ、日本人がハワイ社会で生活することをますます難しくする大きな問題となっていた。

(2) バイブル・ウーマンとしての教え子らとの協働

これらの問題の解決に、タルカットの教え子たちが重要な役割を果たしていた。タルカットがハワイで日本人女性への伝道に従事した時期には、これまでの日本での教育活動における教え子の女性3人が、ハワイ日本人社会で一目置

かれる働きをしていた。甲賀ふじ、宗えい子、岸本つるである。

甲賀ふじは、神戸におけるタルカットの最初の教え子のひとりであり、すでに幼児教育のエキスパートとして活躍していた。1897（明治30）年9月、甲賀はホノルルの無償幼稚園組織の一つである日本人幼稚園に招聘されて赴任した。⁽⁵⁹⁾勝村とも子によれば、甲賀の招聘については、無償幼稚園を運営する The Free Kindergarten and Children's Aid Association of the Hawaiian Islands（以下FKCAAH）が、ハワイの日本人移民社会の状況に鑑み質の高い幼稚園教員を広く求めていたところに、O.H. ギューリック夫人を通じて名があがった。日本人だけでなく中国人、ポルトガル人などの移民とハワイ現地人というさまざまな人種の入り混じる子供の教育に当たらねばならない無償幼稚園においては、経験が豊かで最先端の幼児教育も学んできた教師が特に求められていた。FKCAAH がハワイウーマンズボードから派生独立した組織であったことから、甲賀のような最適な教師を招聘することができたと勝村は指摘している。甲賀は宗えい子とともに日本人移民の子どもたちの幼稚園教育に携わり、幼稚園の母の会を通して日本人移民女性の家庭環境の改善にも尽力した。さらに甲賀は日曜学校の教師として、また日本人教会のメンバーとしても活発に活動し、重要な働きをしていた。日本人の子どもも多くは両親ともに長時間の労働によって家庭でのしつけに余裕のない状態であったため、幼稚園に通っている間だけでなく、日本人教会の日曜学校やディスクールで常に子供たちと接することができる甲賀は、伝道と社会福祉の側面を持つ活動の両方を一貫して行える立場にあったのである。

宗えい子は前述の通り、来布以前から O.H. ギューリック夫妻を助けてバイブル・ウーマンとして活動してきた。日本からハワイでの伝道に転じたギューリックは、醜業婦問題を中心とした当時のハワイ社会における日本人移民女性の劣悪な生活環境を改善するべく、日本人移民女性への伝道の必要を強く感じていた。また同時に、日本人移民社会の多くを占める労働者階級の女性に対し

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動

て社会福祉の要素を含んだ活動をも行うことのできる伝道者の招聘を考えていた。その候補者として、福岡でともに伝道活動をした宗えい子が念頭にあったとみられる。ギュリックはハワイウーマンズボードと連携して日本人女性伝道者の来布を進めた。その結果1895 (明治28) 年、宗はハワイにわたり、ギュリック夫妻の伝道活動を支援するとともに、ホノルル日本人教会婦人会のメンバーとして日本人婦人ホーム及び無償幼稚園の運営に携わることとなった。日本人婦人ホームは、弱い立場にある女性を収容保護する場所として1901 (明治34) 年に設立され、日本人教会婦人会が運営にあたり、宗がその責任者となった⁽⁶⁰⁾。これらの活動を通して宗は、キリスト教伝道にとどまらず、労働者階級の日本人女性に対する社会福祉につながる成果をあげることができた。また一方で、キリスト教という共通項からアメリカ人クリスチャン婦人との信頼関係を築き、日本人女性の中でも教会で活動する余裕のある婦人メンバーとも協力が可能であった。宗は女性でただ一人、HEA において日本人伝道に携わる伝道者として認められており、日米双方のクリスチャン社会でその立場を確立していたのである。タルカットは、先に見た通り在米中から宗の活動に注目して、バイブル・ウーマンの目指すべき姿とみなしていた。

岸本つるは、神戸の女学校を1884 (明治17) 年に卒業した第2回卒業生5名のうちのひとりである⁽⁶²⁾。卒業後は学校に残って教鞭を取り、さらに梅花女学校でも英語を教えた。1900 (明治33) 年7月ハワイへ渡航⁽⁶³⁾、ホノルルで結婚したが夫を亡くし、後半生はホノルルの Y.W.C.A. で長年にわたって尽力した。岸本の Y.W.C.A. での活躍を伝える消息は神戸女学院同窓会誌『めぐみ』にたびたび掲載されている。

この3人の他に、実業家の尾澤忠元と結婚してホノルルに在住していた尾澤しづも神戸の女学校第3回卒業生である。尾澤は卒業後、創立時の松山女学校 (現在の松山東雲学園) に無給奉仕を申し出て勤務、さらに熊本女学校で教鞭を取った⁽⁶⁵⁾。

また、タルカットと直接の関わりは明らかではないが、同時期にホノルルで活躍していた日本人クリスチャン女性である谷村⁽⁶⁶⁾かつについても述べておきたい。谷村は和歌山県出身で、大阪で女中として働くうちに ABCFM 宣教医のテイラー (Wallace Taylor, 1835-1923) と出会った。テイラーを通じてキリスト教に接し受洗、テイラー夫妻の援助により看護婦の道に進むこととなった。1892 (明治25) 年、第5回卒業生として京都看病婦学校を卒業したのち、母校や伝染病隔離病院で働き続けた。1899 (明治32) 年、谷村は妹のすえの出産を助けるためハワイに渡った。すえはコハラ伝道・香蘭女塾での教育事業等に尽力した神田重英の妻である。同年7月にハワイに渡った谷村はホノルルにとどまり、以後、日本人病院の看護婦として、また助産婦として引き続き活動した。1904 (明治37) 年、40歳で病没した際はホノルル日本人教会で盛大に葬儀が執り行われ、多数の人々が集まったという。谷村が京都看病婦学校に在学した期間はちょうどタルカットが教鞭を取っていた時期であり、スタッフとして産科専門の佐伯理一郎医師が指導⁽⁶⁷⁾してもいた。タルカットが谷村について直接言及している記録は、現在のところ見いだせない。しかし、京都看病婦学校に同時期に在籍し、ホノルル日本人社会でクリスチャンの看護婦として知られていた谷村とタルカットの間に全くかわりがないとは考えにくく、タルカットはハワイ滞在中に何らかの協力を得ていたのではないかとみられる。

タルカットのハワイ伝道支援期間中に活躍していた3人の教え子の中には、すでにタルカットが理想的なバイブル・ウーマンとして紹介した人物が2人含まれていた。甲賀と宗のハワイでの働きからは、タルカットが求めるバイブル・ウーマン像を描くことができる。それは、宣教師と協力して伝道を行うが主体的な伝道活動もでき、さらに伝道以外の社会活動ができる資質を持っている人物であると考えられる。同時期の日本における他教派、例えば米国婦人一致外国伝道協会 (The Women's Union Missionary Society of America for Heathen Lands) の設立した偕成伝道女学校においては、養成されるバイブル・ウーマ

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動の役割は宣教師に協力して伝道を助けることが中心であった。⁽⁶⁸⁾ また、改革派の宮城女学校の事例においても、卒業生でバイブル・ウーマンとなった者は女学校で受けた聖書教育の知識を持って地域の伝道を補佐する働きを担っている。⁽⁶⁹⁾ 一方タルカットは、宣教師に協力するだけでなく、バイブル・ウーマン自身も社会に貢献できる技量を持っていることを重要視していたのである。つまり、バイブル・ウーマンは、伝道活動によってキリスト教の信仰を同じ日本女性に広めるだけでなく、社会での活動を通してより幅広い層、すなわち男性や普段は接することのない層の女性にもキリスト教の教えを伝えることのできる存在となるべきであるとみていた。

ハワイでのタルカットの活動についてはさらに、LL1902 (明治35) 年3月号に掲載されているタルカットの書簡抜粋からも知ることができる。⁽⁷⁰⁾ この書簡においてタルカットは、自身の日本帰任はスカッター夫妻の来任次第であるとし、日本で起こっている大挙伝道の影響を受けてハワイで行われていた伝道活動について詳しく記している。

私たちは最近、年が明けて以降、路上伝道を行なって特別な伝道奉仕をしています。クリスチャン寄宿学校の男女生徒たちが、キリスト教の真理を記した明るい色の提灯や幟をもって、2つの行列の核となっています。路上で私たちがいちばんよく歌うのは「ジョージア行進曲」で、歌詞は路上伝道のために日本で作詞されたものです。人々が集まってくると行列は止まり、短いお話をします。そのあと、教会か礼拝堂まで行列についてくるように誘い、そこで長い礼拝を行います。数年間アメリカに滞在し、最近シカゴのムーディ・インスティテュートから日本に戻る途中の若い日本人のキニワ氏⁽⁷¹⁾が幸いなことにこちらにいて、ほとんどの説教をしています。

4日間にわたるこの活動の成果を集計するようなことはもちろんできませんが、私たちは、「キリスト教について学びたい」と住所氏名を書いた

250人の名簿を手に入れました。このことは個人への伝道活動につながるものです。60人以上が「キリストを救い主と認める」とサインをしましたが、私は、その全員がこのことが何を意味するか分かっているかどうかを疑わしく思っております。クリスチャンたちは人の心に訴える新たな神の力を感じて刺激を受け、私たちは収穫の年となることを期待しております。

いわゆる20世紀大挙伝道について、タルカットは地元英字紙に長文の投稿をした。⁽⁷²⁾また前述のように、この年の10月に開催されたハワイウーマンズボードの月次会で、日本の大挙伝道について講演し、その成果がいかにすばらしいものであったかを強調して語っている。⁽⁷³⁾タルカットは、実際に日本で体験していない大挙伝道についてなぜこれほどまでにハワイの日米クリスチャンに訴えようとしたのであろうか。その理由として、タルカットが感じていたハワイでの日本人伝道の困難な要素である日本人伝道者と信徒との温度差や日本人移民社会の構造的な問題などが、日本で成功を収めた大挙伝道という方法で取り除かれるとみたのではないかと考えられる。また、アメリカ人クリスチャンに日本の大挙伝道の盛況を伝えることによって、日本での伝道活動の活発さをアピールし、理解と支援を訴える目的もあったとみられる。そうしてハワイの日米双方のクリスチャンに伝道に対する関心を引き起こし、ハワイでの伝道を成功に導く足がかりとしたのではないか。この日米双方のクリスチャンを結びつけるに際し、タルカットは甲賀や宗らがバイブル・ウーマンとして役割を果たしてくれたのではないかと期待を寄せていたとも考えられる。

おわりに

タルカットの2度目の賜暇帰米とそれに続くハワイでの伝道支援の期間は、日本派遣宣教師としてのタルカットの生涯の中で、それまでの経験を総括し残

イライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動の任期にどのように活かしてつなぐかを探究する時となった。在米中には、日本伝道、特に女性への伝道の成果として、幅広く活躍できるバイブル・ウーマンの重要性に注目し、職業を持ちつつ社会人としても自立した女性を理想とするバイブル・ウーマン像を提示するようになった。その事例として自身の教え子たちをあげることにより、さらに説得力のあるアピールとなった。

ハワイ伝道支援に関しては、日本での長い伝道経験を買われてハワイでの伝道応援を求められたタルカットにとっても、ハワイ日本人社会の様相は日本本土と全く異なっており、伝道に困難を感じていたようである。そのような状況下、タルカットがバイブル・ウーマンとしても信頼を置く甲賀ふじ、宗えい子の存在は、この2人がハワイの日米双方の社会で名を知られ、その活動が広く認められていたところから、タルカットの伝道活動にとって大きな助けとなった。彼女らは男性中心の日本人移民社会においても中心的な役割を果たしており、誰からも一目置かれていた。さらに、すでに深いつながりを持っている ABCFM 宣教師やハワイウーマンズボードを通じてアメリカ人社会とも自然な関係を作ることができており、当時のハワイキリスト教界の全方向に向いていたと言える。タルカットはハワイにおいて、すぐれたバイブル・ウーマンが伝道地で重要な役割を果たしうることを実感し、甲賀や宗を理想とした日本人バイブル・ウーマンの養成に自身の日本伝道の成果を還元するということを、日本帰任後の活動の中心に据えようとしたのではないかと考えられる。

タルカットの日本での伝道活動は40年にわたり、それはほぼ明治時代の期間に相当する。その間に日本社会の状況は大きく変化した。タルカットが伝道活動の対象とした、女性の置かれた立場、キリスト教に対する見方もそれに伴って移り変わっていった。タルカットは、実際の伝道の場においては変化する状況に対応した伝道スタイルを求めてさまざまな活動に参画した。自身の経験から得た日本伝道に最適なスタイル、それに合致し、かつ日本人女性クリスチャ

ンの生き方の一つの方向を示すものとしてバイブル・ウーマンに行き着いたのである。

日本伝道を行っていたキリスト教他教派のバイブル・ウーマンの活動及び他の海外伝道地におけるバイブル・ウーマンのあり方については、本論文においては十分に触れることができなかった。この点をさらに考察し、タルカットのバイブル・ウーマン観との比較検討を今後の課題としたい。

注

- (1) 宣教師の男女を区別して表す際、女性に関して従来は「婦人宣教師」と表現されてきたが、近年は「女性宣教師」が一般的である。本論文では「女性宣教師」に統一し、引用文についても「婦人宣教師」を「女性宣教師」と改めた。
- (2) 現在の神戸女学院の校名は、創立初期には定まったものがなかった。ABCFM 関連文書では Kobe Home、(Kobe) Girl's School あるいは (Kobe) Boarding School と記されているものが多く、日本語では女学校（おんながっこう）と呼ばれることが多かった。本論文では、1879年に「英和女学校」と称するようになるまでを「女学校」とするが、1875年の正式開校以前は内容に応じて「私塾」と「女学校」両方を使用する。なお、校名を神戸女学院としたのは1894年である。
- (3) タルカットに関する主な先行研究は、以下のものがある。
鈴木恒彌・若山晴子「タルカット書簡－訳および註」一、二『神戸女学院大学論集』24巻3号、25巻3号、1978年、1979年。
同「イライザ・タルカット女史略年譜」『学院史料』第4号、1986年。
渡辺久雄「タルカット女史の鳥取伝道と鳥取英和女学校」『学院史料』第6号、1988年。
同「京都看病婦学校とタルカット女史」『学院史料』第7号、1989年。
- (4) ABCFM の年次報告書 Annual Report、ABCFM 日本伝道団の年次報告書 Annual Report、ABCFM 機関誌 Missionary Herald（以下 MH）、ABCFM 協力団体 Woman's Board 機関誌 Life and Light（以下 LL）がある。
- (5) 1895年12月22日附京都発
- (6) LL, February, 1896, p.184
- (7) 旭光1896（明治29）年3月5日号
- (8) 1897年8月11日付ニューロンドン発
- (9) 1898年5月13日付ニューロンドン発
- (10) MN, September, 1899, p.2

- (11) 1899年8月3日付オークランド発
- (12) *MN*, September, 1899, p.12, *MN*, December, 1899, p.12. *LL*1899年454-5頁には9月7日に開催された海外赴任宣教師の送別会の記事があり、日本赴任宣教師の中にタルカットの名前がある。
- (13) 1899年10月16日付オークランド発
- (14) *MH* 1900年4月号161頁には、「2月9日にサンフランシスコから日本に向けて出帆予定であったミス・イライザ・タルカットは事故 (accident) により引き留められ、後で出発となるであろう」とある
- (15) *MH* 1900年7月号291頁に「6月6日サンフランシスコよりミス・イライザ・タルカット日本帰任」とある
- (16) ウーマンズボードはアメリカで最も歴史の古いプロテスタント教派別女性団体で、女性信徒による海外伝道支援団体として、ABCFM と協力して女性宣教師派遣に関わった。タルカットら女性宣教師はウーマンズボードの支援を受けてそれぞれの伝道地に派遣されていた。
- (17) *LL*, December, 1896, p.553
- (18) *MH*, November, 1897, p.480
- (19) *MN*, November, 1898, p.12
- (20) *LL*, April, 1899, p.232
- (21) *LL*, June, 1899, p.421
- (22) *LL*, March, 1897, pp.98-102
- (23) *LL*, January, 1896, pp.12-13
- (24) 日本のバイブル・ウーマンに関しては、鈴木正和「偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブルウーマン—失われた姿を求めて—」、『共立研究』第7巻第1号、2001年、1-10頁。栗原健「明治期における宮城女学校のバイブル・ウーマンの活動～明治後期の年次報告から～」、『宮城学院資料室年報『信望愛』』第26号、2021年、36-49頁。
- (25) ダッドレーとバロウズにより創設された学校は当初は女子伝道学校 (Women's Bible School) と呼ばれており、1908 (明治41) 年、コザートが神戸女子神学校 (Kobe Women's Evangelistic School) と名称を改めた。
- (26) *LL*, March, 1897, pp.98
- (27) 表紙写真には "Bible Women in Japan" として3人の女性が写っているが、左端の女性については言及がない。
- (28) Lieutenant George Clayton Foulk (1856-1893) はアメリカ海軍将校として東アジアで長年勤務したのち、1889年に同志社の数学教師として着任。1893年に不慮の死を遂げた。
- (29) *LL*, March, 1897, p.98, p.100
- (30) 村瀬かねについては竹中正夫『ゆくてはるかに 神戸女子神学校物語』教文館、

- 2000年、105-106頁。
- (31) 加藤常子については竹中前掲書、103-105頁。
 - (32) *LL*, March, 1897, p.100
 - (33) 宗えい子については Kelli Yoshie Nakamura, “Yeiko Mizobe So and the Japanese Women’s Home for Abused Picture Brides (1895–1905)”, *Amerasia Journal*, 36:1, pp.1-32, DOI: 10.17953/amer.36.1.456118723874082k に詳しい。また、竹中前掲書、85-89頁。吉田亮「ハワイ移民の母・宗栄子の生涯と信仰」『基督教世界』3420号、1985年。『故宗栄子女史と其の遺業』、私家版。
 - (34) *LL*, March, 1897, p.100, p.102
 - (35) *LL*, March, 1897, p.102
 - (36) *LL*, April, 1899, pp.146-148. Mrs. S. B. Capron はインド、セイロンで伝道に携わった宣教師の夫人でウーマンズボードの Director Member の一人
 - (37) ハワイの社会状況に関しては、同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC 出版、1991年の諸論文及び年表、京大西洋史事典編纂会編『新編西洋史辞典』東京創元社、1993年を参考にした。またハワイ州公認ウェブサイトを ALOHA PROGRAM (<https://www.aloha-program.com/> 2023年10月23日閲覧) も参照した。
 - (38) ABCFM Japan Mission Annual Report
 - (39) 1900年6月15日付 *The Hawaiian Gazette* には、6月12日入港の S.S.Gaelic 号でサンフランシスコから到着、神戸行の乗客の中に Miss E. Talcott の名がある
 - (40) 吉田亮によれば、ハワイアン・ボードの書記エマーソンがゴードンに対しハワイ伝道への協力を求め、ゴードンはその要請を受け入れた。しかし健康上の理由からハワイ行きを辞退、その後急死したため、すでにハワイにいて伝道を助けていたタルカットがその任に当たることとなった。吉田亮「ホノルル日本人教会の信仰表現者たち」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC 出版、1991年、380-381頁。
 - (41) 註12の *The Hawaiian Gazette* だけでなく *The Honolulu Republican* にも同様の記事がある
 - (42) やまと新聞1900年7月7日号
 - (43) *The Evening Bulletin*, August 8, 1900
 - (44) *The Hawaiian Gazette*, August 10, 1900. このウーマンズボード月次会では、義和団事件に巻き込まれた宣教師をハワイに避難させて救援することが決定されている。タルカットは、そうした宣教師の消息を参会者に報告した。
 - (45) やまと新聞1900年9月20日号、*Evening Bulletin*, September 20, 1900
 - (46) *The Pacific Commercial Advertiser*, September 29, 1900
 - (47) *The Committee on Home Missions*, October 1, 1900. この委員会はハワイで伝道を行っているキリスト教各派の超教派委員会である。

- (48) The Pacific Commercial Advertiser, October 3, 1900
- (49) 書簡の中では evangelist となっている
- (50) The Evening Bulletin, November 20, 1900等各紙に掲載
- (51) The Home Committee, January 31, 1901
- (52) The Pacific Commercial Advertiser, April 24, 1901
- (53) The Evening Bulletin, June 19, 1901
- (54) HEA Annual Report, 1901, 1902
- (55) ABCFMの初期ハワイ伝道に関しては Albertine Loomis, *To all people : a history of the Hawaii Conference of the United Church of Christ*, Honolulu, Hawaii Conference of the United Church of Christ, 1970 に詳しい
- (56) O.H. ギュリックのハワイ着任に関しては、吉田亮「日本ミッション“支部”としてのハワイ伝道－O.H. ギュリックとハワイ日本人伝道－」『キリスト教社会問題研究』36号、1988年、92-146頁。
- (57) スカッターのハワイ伝道活動については吉田亮「ハワイ日本人移民とキリスト教越境伝道－来日アメリカ宣教師ドレマス・スカッターの事例－」『同志社アメリカ研究』第45号、2009年、1-24頁。
- (58) 吉田前掲論文「日本ミッション“支部”としてのハワイ伝道－O.H. ギュリックとハワイ日本人伝道－」、127頁。
- (59) HEA Annual Report, June, 1898
甲賀ふじのハワイでの活動については勝村とも子「幼児教育史研究－無償幼稚園運動(1) ホノルルの日本人幼稚園と甲賀ふじの果たした役割 [1897年～1902年]」『樟蔭東女子短期大学研究論集』第9号、2006年、45-52頁。同「幼児教育史研究－無償幼稚園運動(2) 甲賀ふじとハワイ島コハラの幼稚園 [1902年－1904年]」『樟蔭東女子短期大学研究論集』第11号、2010年、47-53頁。
- (60) 吉田亮「ホノルル日本人教会の信仰表現者たち」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC 出版、1991年、378-416頁。
- (61) また宗は1899年の日本人教役者会設立発起人として署名した8名の伝道者のうち唯一の女性である。杉井六郎『遊行する牧者－辻密太郎の生涯』教文館、1985年、310-313頁。
- (62) 神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史 各論』神戸女学院、1981年、209頁。
- (63) 神戸女学院同窓会『めぐみ』第24号、明治33年7月、8頁。
- (64) 明治33年3月発行の神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第23号12-13頁に「在布哇 尾澤静子より」として書簡の抜粋が掲載されている。自身と甲賀ふじの近況について記しており、全文(かなづかい・漢字は現代のものに改めた)を以下に掲げる。
〔(上略) 小妹事昨年九月夫の転業致候為共に渡航当地に移住致候(中略) 当地にて同窓の友としては甲賀姉のみに御座候同姉は実に熱心に幼稚園の為御働き被為居候殊

に昨年来ベスト流行に付同胞の悲境にある者の為には昼夜を別たず非常なる御働を被成しにより大に疲労せられ再度熱病に罹り一ヶ月前より病院に入りて治療なされ居候尤昨今は病熱大に減じ居候えども何分身体衰弱致居候何卒同姉のため御祈り下され度願上候小妹は当地に参りてより同姉に遇う毎に昔を語りて互に愉快を感じ申候実と同窓に養われし友ほどなつかしき者は御座なく候申上度事は山々御座候えども後の便にと申残候かしこ」

- (65) 神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史 各論』神戸女学院、1981年、209頁。
- (66) 谷村かつ（1863-1904）については飯田耕二郎「ハワイの日本人社会に尽力した基督者」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC 出版、1991年、417-457頁に詳しい
- (67) *LL*, September, 1892, pp.418-420のペリーの記事
- (68) 鈴木正和「偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブルウーマン－失われた姿を求めて－」『共立研究』、第7巻第1号、2001年、1-10頁。
- (69) 栗原健「明治期における宮城女学校のバイブル・ウーマンの活動～明治後期の年次報告から～」『宮城学院資料室年報『信望愛』』第26号、2021年、36-49頁。
- (70) *LL*, March, 1902, pp.118-119
- (71) 文中では Mr.Kiniwa となっている。Kimura の誤植とみられ、新潟県出身の木村清松か。
- (72) *Friend*, November, 1902
- (73) *The Pacific Commercial Advertiser*, October 8, 1902

ライザ・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) の米国及びハワイにおける活動

関連年譜

| | タルカット関連事項 | ABCFM 日本伝道団 / 日本国内キリスト教関連事項 | 米国社会関連事項 | タルカット書簡事項 |
|---------------|---|--------------------------------|-----------------|---|
| 1896 (明29) | 2: 賜暇帰米 5: 米国帰国 11: WBM 年次総会出席、広島での活動について報告 | 8: 同志社在職の ABCFM 宣教師が辞職 | | |
| 1897 (明30) | 10: ABCFM 年次総会に出席 | | 6: ハワイ併合 | Jun.30 #40 New London Aug.11 #41 New London Nov.27 #42 New London Dec.3 #43 New London |
| 1898 (明31) | この年前半、クリフトン・スプリングスに滞在、保養 | | | May 13 #44 New London |
| 1899 (明32) | 3: WBMP の Quarterly Meeting 出席、日本における教育活動について報告 5: WBMP の 6 月例会に出席 10: サンフランシスコより日本に向けて出発の予定を延期 | 7: ABCFM 日本伝道団次総会でタルカットの京都帰任要請 | | Jun.29 #45 Niles Aug.3 #46 Oakland Oct.16 #47 Oakland Nov.6 #48 San Francisco Dec.5 #49 Oakland |
| 1900 (明33) | 2: サンフランシスコ出発の予定を延期 6: サンフランシスコ出発、ホノルル到着 9: 在ホノルル府日本人基督教会よりハワイ風景写真集を贈られる | | | Jan.13 #183 Oakland Jan.26 #184 Oakland Feb. 9 #185 Oakland Jun.11 #186 S.S.Gaelic Oct.12 #187 Honolulu Nov.30 #188 Kohala |
| 1901 (明34) | ホノルル在住日本人への伝道活動に従事 | | 1: ホノルル・ベスト焼払事件 | Jan.21 #189 Honolulu May 15 #190 Honolulu |
| 1902 (明35) | 12: 横浜着、神戸帰任以後、神戸女子神学校を拠点に、学校での指導と伝道活動 | | | |
| 1903 (明36) | 3: 神戸女学院において、ハワイにおける伝道活動について報告 4: 婦人矯風会第10回大会に出席・講演 10: 日本組合教会総会に日本伝道団代表の一人として出席 | | | Mar.6 #191 Kobe Aug.31 #192 Karuizawa Dec.11 #193 Kobe |

参考文献

一次資料

Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions: ABC 16: Missions to Asia 1827-1919, Research Publications, Woodridge, ca.1983 (マイクロフィルム)
Annual Report of the American Board of Commissioners for Foreign Missions
Board of Hawaiian Evangelical Association Annual Report
Life and Light for Woman
Missionary Herald of the American Board of Commissioners for Foreign Missions

The Friend
基督教新聞
やまと

二次資料（本文中に挙げなかったもの）

Lawrence H. Fuchs, *Hawaii Pono: A Social History*, New York, Harcourt Brace & World, 1961

飯塚久栄、佐藤亜紀「資料紹介『HISTORY OF THE JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES 1879-1904』ヘンリー・K・ミラー編集」『宮城学院資料室年報『信望愛』』第26号、2021年、5-35頁。

Jennifer C. Snow, *Protestant Missionaries, Asian Immigrants, and Ideologies of Race in America, 1850-1924*, New York, Routledge, 2007

吉田亮「アメリカン・ボード日本ミッション宣教師の「越境」伝道：一九世紀末期日布間の宣教師ネットワークとハワイ日本人移民」『国際日本文化研究センター紀要 日本研究』第30号、2005年、33-50頁。